

光輝く珍しい玉の話

元禄の初めの頃の話でした。今泉の永禄寺というお寺に
観松かんしょうというお坊さんがおりました。

観松さんは、新潟の山奥の川の中から光る珍しい玉を拾
って来ました。この玉は、菊の花のようがあってピカ
ピカとかがやく、すばらしい石の玉でした。

お寺の本堂にお供えして置くと、夜など遠くからお寺を
見ると龍宮城のようにポーッと輝いて見えました。だから、
近郷近在の人々は今泉の永禄寺様はお光のお寺様だ。薬師やくし
瑠璃光寺様るりこうてらだと呼んでお参りをしました。

この玉で からだの悪いところを撫てもらうと、だんだ
んよくなりましたから、ありがたいお薬師様の宝珠さまだ
とありがたがられて、遠くからも杖をついたり、車に乗っ
たり、馬やかこに乗って病人がわれも、われもと集ってき
ました。

このことがお殿様のお耳に入りました。そこでお殿様は
「これはすばらしい玉だ。こんな珍しい玉をいなかのお寺

におくのはもったいないから、お城へあげさせよう。そし
て城下町のわしの寺に置いて、わしがお金をもうけようと
考えました。

そして、お寺に使い出し、この珍しい玉をお城へ献上さ
せました。それに替わるものとして、お薬師様の木像をの
こしました。

村の人々は、お寺の西の岩山の南向きにお薬師堂を建て
ておまつりしておがみました。

このお薬師堂は、夕方のうすやみの中にポーッと龍宮城
のように輝やき、光る玉がある時と同じく、お参りをする
人々にありがたいご利益りやくをさずけてくれました。

ところが、ある年のことでした。江戸に熱病ねつびが流行まし
た。今泉村の江戸のお殿様の若君様とお姫様、それに、今
泉から江戸屋敷へ仲間奉公ちゅうみんにあがっていた弥作と嘉作の二
人も一緒にかかってしまいました。

ありがたい光の玉で若君様とお姫様は毎日からだを撫て
いただきましたが、仲間奉公ちゅうみんにあがっていた弥作と嘉作は
一回も撫てもらうことができませんでした。

そのせいで、あったかかわからないが若君様とお姫